

古田足日論序説

―「実感的道德教育論」を中心に―

西山利佳

(キーワード) 児童文学、古田足日、道德、平和、教育

はじめに

「実感的道德教育論」は、児童文学者古田足日が、なぜ児童文学を選んだのか、なぜ平和のための活動を牽引してきたのか¹⁾、そのルーツが分かる評論だと言える。関連評論と創作作品を重ねあわせて、古田の思考を追うことは、古田足日研究の一端であると共に、児童文学、生き方、時代を問い直す視点の獲得につながると思われる。

第一章では「実感的道德教育論」を熟読し、「道德」や「修身」が同時代、どのような背景の下焦点化されていたかを押さえた上で、古田の「道德」観、「修身」観を捉えたい。

「実感的道德教育論」の中で、古田自身が思考の到達点として言及している創作「風雲カピラ城」は、二度にわたって連載発表されるが、未完のままになった作品である。第二章では、初出時と再連載時の異同を確認しながらその内容をまとめ、古田がこの作品の中で考えようとしていたことを追う。古田の評論の中で明示されている人間観や問いを通して「風雲カピラ城」を見たときに浮かび上

がってくるものを第三章で考察していきたい。

尚、本稿は本紀要第七一輯(二〇一七年)掲載の「子ども」と「戦争」をつなぐ「物語」の諸問題―「瑞穂の国ゼロ時間」を中心に―に連なる考察となる。

第一章 「実感的道德教育論」を読む

第一節 解題

「実感的道德教育論」は月刊誌『人間の科学』第二卷第三号(誠信書房、一九六四年三月)に掲載された。その後、古田足日の第二評論集『児童文学の思想』(牧書店、一九六五年一月)に収録される。古田はその「まえがき―あとがき調に―」の中で次のように述べている。

(収録した)十五編の評論中、自分でもっとも印象深いのは「実感的道德教育論」である。「実感的道德教育論」は児童文学批評をせまく考えれば、その分野からみだしているかもしれない。

しかし、ぼくにはそのように書くしか道がなかったようで、いまのぼく自身にぴったりとくるものは、やはりこの作品である。

これは、各章にエピソードを配したイメージ連鎖的な独特な評論である。初出と評論集収録稿の間には、エピソードの出典の誤りと、自身の出身校名の誤記が正されているのと、こまかな表記の違いがあるだけで内容はそのままである。以下、引用は『児童文学の思想』から行う。

「実感的道徳教育論」は五つのパートから成る。まず、「風景」と見出しを付けたパートは、「春と修羅」の引用「いかりのながさまた青さ（略）おれはひとりの修羅なのだ」の提示から始まる。

「ケネディが殺されて数日のち、あざやかに心の中にかびあがってきたことがあった」として書かれるのは、昭和二〇年の暮れ近い頃のワンシーンである。友人が何の脈絡もなく口にした「あの日、なぜ日本の家いえは弔旗をかかえて敗戦を悲しまなかったのだろう」という言葉。（その友人は、翌年の春に栄養失調で亡くなったという。）古田はその時の風景を思い出し、日の丸と弔旗が日本を覆う風景を幻視する。

しかし、現実には八月二五日にも、炭鉱の爆発事故と東海道線の事故で、合計六二〇人ものが亡くなった一九六三（昭和三八）年十一月九日にも弔旗はひるがえらなかつた。

一方でケネディ暗殺に涙が止まらなかつたという「主婦」の新聞投書を読み、その若い母親の肺と肋膜と衣服まで癒着している断面図を幻視する。

次に「動機」と題されたパートは「おおきみのため／神風はつばさつらねて／きようもいく」という「軍神関中佐の歌」で始まる。

一九六二年⁽¹⁹⁶²⁾十一月二六日に、都内の教会で行われたケネディ追悼ミサに皇太子夫妻が参列した。「この皇太子夫妻参列予定の新聞記事を見たとき、ぼくは頭に血が上るのをおぼえた」と吐露する古田の憤りは激しい。「天皇が行ない、かつ行なわなかつた行為に対して、ぼくはなぜ歯をかみならすのか」(p19010)と自問し、「心の奥底にやはり天皇は生きていた」と思い知る古田は、「かつての愛国心教育、あるいは二千年の伝統」の根強さを思うのだが、一方で、「その根強い愛国心があつたのなら、なぜ昭和二十年八月十五日、日本の家いえに弔旗がひるがえらなかつたのか」(p19015)と問う。そして、その愛国心は根強い一方でもろかつたのだ、天皇を中心とした道徳が全国的な規模で成立していたように見えていたが、実は成立していなかつたのだと述べる。

「天皇のかわりに戦後登場」した「文化や民主主義やエチケツト」もまた新たな観念であり、それに奉仕する、「権威に追従する」現状を「愛国心が養われていなかつたもろさと、天皇信仰の強さが癒着している」と古田は分析する。

つぎの「けじめ」のパートにはエピソードはない。

戦前と戦後のけじめをつけていないから、癒着作用が起ると述べる古田は「はっきりとしたけじめがある」作品として、ドレーターの「最後の授業」を挙げ、そのプロシヤ兵の描かれ方に注目する。そして、「相手を異質のものとして認識しないかぎりには、愛国心も、さらには国際理解もあつたものではない」(p19014)と述べる。

次のパートは「原型」と見出し語を挙げ、「ね、きみ、童話とは

／原理だよ。」(ある児童文学者の発言より)というエピグラフのあと、敗戦後、天皇という原理が消え、心に開いた大きな穴を埋めるために、自分には天皇に代わる原理が必要だったと述懐する。

続けて古田は人間の教育について分析する。人間の教育には、「かつて人間がさずきあげたものを抽象化によって伝達、獲得していくこと」と「身ぢなな具体的な事物に即して学びとっていくこと」(p196L1)の二つの方法がない交ぜにされていると解く。国民的規模、質での道徳はこの二つの方法が統一されていることで成立するのだが、戦前の教育は前者の方法のみ、一方通行で修身教育が行われていた。その結果「ほんねとたてまえが分離される」(p196L10)、その例として少年時代の体験を綴る。先生がいるところといないところで、まったく違う態度を見せる級友にあっけにとられた体験である。

ぼくはあっけにとられた。何が彼らの本心なのか、ぼくにはわからない。もしも自分が悪くないのなら、先生に対して自分は悪くないということをどうどうと主張するのが、ぼくたちの受けた修身教育であつたはずだ。

修身をがんとして受けつけない不死身の連中がいたわけだ。だからといって、彼らのやったことが正しいといえるのか。柳に雪折れなく、修身教育を頭をさげてやりすこす生き方を、抵抗として認めることができるのかどうか。

(略) 天皇をまともに受けとめたから、ぼくの心には空洞がある。頭をさげてやりすこした連中のなかには、もともと空洞の生まれる余地はなかったのではないかと、ぼくは彼らがうら

やましかつた。(p197L7～L16)

しかし、他人はどうあれ、空洞を抱えてしまった古田には原理が必要だった。そして、古田は戦後示されたいくつかの原理の中から平和を選ぶようになった。そして、戦争による被害を思えば憤怒に駆られる。この感情と原理としての平和を結び、体系づけるのが何か分からずにいた古田は、シャカの伝記に出てくるマハーナマという人物に出会う。そこで紹介するシャカ族滅亡の物語が、「風雲カピラ城」の元になる。

古田は、「児童文学は原理そのもの」であり、それは、「人間の精神と行動の原型」であるから、原理を求めていた自分が児童文学に入り込んだのだとその動機を理解する。

最後のパートは「金・企業」と見出し語を掲げ、エピグラフは四歳児と中学二年生の言葉を引いている。いずれも学歴社会の本音があからさまな言葉である。

人間の欲望が物質的欲望だけになり、「未知のものに対する強烈な好奇心と、冒険」といった欲望は圧殺され、高次の原理不在のうちに金を最高の原理とする体系が築かれつつあると時代を分析し、金・企業の原理の進行を懸念する。そして、シャカ族滅亡の物語のラストシーンの構想を述べ、再び甲旗のイメージを示してこの論を閉じている。

第二節 「道徳教育」に関する時代背景

「実感的道徳教育論」が掲載された号の特集は「現代の教育」と

なっている。目次を見るだけでも、その中でも、「道徳」に大きな比重が置かれていることがわかる。

その背景としては、一九五八（昭和三三）年四月から小中学校において「道徳」の時間が特設され議論されていたということが大きいだろう。この「特設道徳」に先んじて、一九五〇（昭和二五）年、第三次吉田内閣の文部大臣に就任した天野貞祐の発言をきっかけに、「修身科復活」に反対する声上がり、活発に議論されたという。しかし、翌五年の教育課程審議会の「道徳教育振興に関する答申」の中で、「道徳教育を主体とする教科あるいは科目を設けることは望ましくない」と書かれ、それは一旦立ち消えた。しかし、占領政策の転換の中、戦前の皇国史観による軍国主義を支えた主要科目である「修身科」の復活に激しい反発があったことは当然の反応と思われる。

シヤカ族滅亡の物語「風雲カピラ城」の初出誌『小さい仲間』の連載第四回が掲載された号（三二号、一九五八年二月）には、「岸政府の軍国主義的文教政策に反対する」という声明がページに使って掲載されている。その声明は、自由民主党が「紀元節復活の法案を衆議院内閣委員会に提出した」ことを批判し、最後「われわれは、一、紀元節復活に反対する。一、勤務評定を粉砕せよ。一、修身科復活に断固反対することをここに声明する」と結んでいる。古田足日は「忠君愛国大君のためーぼくはアジア・太平洋戦争のなかでこう育った」⁽⁴⁾の中で以下のように述べている。

天皇に忠誠をつくすこと、天皇の大御心になうように行動すること、これがぼくの「自分はどうか生きるか」の背骨、根

本だったが、それが、しだいしだいにくずれおちていった。

(P21L3)

そして、国定教科書のことを「ぼくが天皇のために死ぬという生きかたを身につけていく土台をつくった」として、国語と修身について自らの子ども時代の体験を綴っていく。

古田足日は、一九三四（昭和九）年に小学校へ入学した。その前年である一九三三年に「超国家主義」「軍国主義」を鮮明にした第四期国定修身教科書が成立した。その性格を更に推し進めた第五期の教科書が出るのが、一九四一（昭和一六）年、古田は中学二年生である。戦争遂行のための教育を、ともに受けた世代であったということを改めて思い知らされる。

このような古田であるから、「修身」「道徳」について考えることには内的必然性があったのだと理解できる。

第三節 古田足日の「道徳」観

1 考察対象文献

「特設道徳」論争が活発化していた、まさに一九五七年から一九五八年にかけて、「風雲カピラ城」は最初の連載がなされている。そこから、「実感的道徳教育論」が書かれる五年ほどの間に古田が書いたものから、「道徳」や「修身」「天皇制」といったキーワードを含む文章を読み、特に以下の四本から古田の思考を追ってみた。それぞれの言及を横断的に考察するので、便宜的に古い順にA

からDの記号を付し、引用出典を記号で示すことにする。

A：「愛国心・規律・正義・団結」国民教育叢書編集委員会編『人間づくりと道徳教育』誠信書房、一九五八年六月。古田の執筆は「V 徳目の吟味とその理解のさせ方」の章の一本で、「正直」「礼儀」「節約」「孝行」「勇氣」「批判」「労働」「友情」「誠実」「権利」「責任」「義務」「自由」「平等」「公德心」「自立」がそれぞれの執筆者により二、三ページずつで書かれているのに対し、古田の所だけ、四つの徳目を並べ、約一一ページ使っている。

B：「一 精神構造の奥にひそむもの」川合章・鈴木喜代春・大畑佳司他著『現場の共同研究』8 現場に生きている修身科』明治図書、一九六〇年四月。「Ⅲ 修身科を克服するために」の「一」を担当執筆している。

C：「修身齐家治国平天下」『現代教育科学』三巻七号、明治図書、一九六〇年七月号。特集・特設道徳の授業批判。

D：「現代の子ども」4 天皇制』『現代教育科学』四巻四号、明治図書、一九六一年四月号。

2 「愛国心」について

古田は「実感的道徳教育論」の中で、「愛国心」を「全国的な規模、質での道徳」の「中心となる」ものとして位置づけている。天皇が国家であり、天皇を生き方の根本としていた古田にとつては当然の捉え方だろう。その「愛国心」という「徳目」をどのように考えるのか、文献Aは、「愛国心」「規律」「正義」「団結」という四つの徳目を現れる場所と質の違いを押さえ整理する。

だから、愛国心、規律、正義、団結という四つの徳目は、ふたつの種類に分けることができます。目的となることのできる愛国心、正義と、目的実現のために役だつ団結、規律の二種類です。(略) 団結、規律は、人間の生活をよくしていくための、人間関係の技術です。それに対して、愛国心、正義は、人間性ということになりましょうか。(A p229L14)

愛国心、正義を人間性というと、疑問を感じる人もいるだろうが、フランス国歌が革命の歌であるように、不変の徳目はない。また、ことばには概念と共に、「ある感動力」が伴うとし、「徳目のかげには、(略) 近代の合理精神に反する、原始的な力」が働いていると述べる。「非常に小さな集団への忠誠、その集団のなかへ自己を埋没してしまう方向は、個人の自覚よりも集団意識の強い原始、未開の人々の考え方」で、「異国人への恐怖が、愛国心を強めます」と述べる(A p23)。古田は文献Bの中で、徳目はたいはい漢字でできあがっており、下からの積み重ねでなく、標語のように上から来て、それに従って生活を律する傾向が出てくるとし、「万世一系、八紘一宇、大東亜共栄圏等、呪術的なことばの使い方はいくらでもあげられる」(B p185上段)と述べる。この「上から」「下から」という捉え方は、「実感的道徳教育論」の中で言及していた教育の主な二つの方法と重なり、戦前の修身がどのように実現されていたのかをことばの面から捉えたと考えて良いだろう。文献Dの中でも古田は「天皇制を支えている要素のひとつに、ことばの呪術性がある」と書いている(D p109上段)。

こう見てくると、小川未明のことばを呪術的なことばとし、そう

いった童話の言葉から決別して小説的な言葉で積み上げられる「少年文学」を求めた現代児童文学提唱が、戦前と戦後のけじめとしてまず決別が重要だったということに思い至る。

「人間もことはも草木も木も同一の存在であり、同一の生命を分かち持っている」原始人のものの捉え方（「さよなら未明」では「原始心性」という言葉を使っていた）では、人間対自然、人間対人間という考えが出てこないのは当然で、「ぼくはぼくたち日本人の精神構造の根底にこの原始的感覚が生きていると思う」（Bp.78）と書く。この原始心性が、呪術的言葉として心の支配をし、一方で社会への目を奪ったということだろうか。文献Bは更に社会への態度について論及していく。

3 社会変革の思想

古田は文献Bの後半で「修身齐家治国平天下」という言葉を挙げ、「治国平天下」を除外した国定修身科に対し、講談社を次のように見る。

（佐藤紅緑の作品は立身出世主義というマイナス面ももちろん）だれもが政治に参加することができる、だれもが新しい社会の建設に参加することができるという考えを、紅緑に代表される講談社文化はうちだしていった。個人の生き方と社会のあり方に対する構想を講談社の修身は持っていたということができれば。（pp.186上段1.22）

古田は「治国平天下」は「未来への構想」だと述べる。そして、この「未来への構想」を「一足とびに引きよせる考え方が積みあげと平行していなければならぬのではないか」と説く。

文献Cはタイトルがそのまま「修身齐家治国平天下」で、文献Bの自らの原稿を引用したあと、「未来への構想」と「政治への関与」から、この言葉を問題にするのだと書く。そして、中学校指導要領の道徳の部に政治に関する項目はないに等しく、「悪法、悪制度に対する批判はどうなるのか」「政界の腐敗はどのようになるのか」（Cp.85中段1.16）と問うている。

文献Dでは、「無条件な社会肯定の態度が、戦前も戦後も、多数の子どもたちの姿勢になっているのではないか」「天皇制と革命と、このふたつに関するかぎり、戦前と戦後の子どもには、それほど大きな変化はないのではないか」（Dp.110）と述べている。

古田は「未来への構想」を「一足とびに引きよせる」方法として、創作を考えていたのかもしれない。次の章で「風雲カピラ城」を読んでいく。

第二章 「風雲カピラ城」を読む

第一節 初出解題

「風雲カピラ城」は早大童話会OBである古田足日らが作った同人誌『小さい仲間』⁵⁾に四回にわたって連載された。掲載の詳細は以下の通りである。各回の文字数を四〇〇字詰め原稿用紙に概算した枚数も記しておく。

第一回 二八号、一九五七年五月一日。六二枚。

第二回 二九号、一九五七年七月一日。約二〇枚。

第三回 三〇号、一九五七年二月一日。約二五枚。

第四回 三一号、一九五八年二月二〇日。約一五枚。

第一回から第三回までは、タイトルに「(仮題)」とある。

第一回は、まず「はじまる前に」という小見出しで一ページ半使
い、作者「ぼく」が「君たち」子ども読者に直接語りかけている。
カースト制の説明も入れながら、中心人物となる五人の少年少女を
紹介している。そして「第一章 魔法を破れ!」「二、アシユラが
村から追い出される」「1」から「8」が展開される。

第二回は、同じく「第一章 魔法を破れ!」の「二、都、シ
ュラヴァステイ」「1」から「3」。第三回は、章、節のタイトルはな
く、「4」から始まり、「6」、そして「7」が四行のみ書かれている。
第四回にはタイトルから(仮題)の文字が消え、「第一章 魔法
を破れ!」「二、都シユラヴァステイ(承前)」というように章・節
のタイトルから始まり、「7」と大書され「(前回、7とある部分
はすてます)」とある。この回は、「7」「8」が、連載中最も少ない
字数で掲載され、結局そのまま終わってしまう。

第二節 再連載の解題

『小さい仲間』で未完に終わっていた「風雲カピラ城」は、約三
年後、掲載誌を『日本児童文学』へ移し、再び連載される。

前節同様、概算した原稿枚数も併記する。

第一回 七巻六号(通巻六一号)一九六一年七月一日。約四〇枚。

第二回 七巻八号(通巻六三号)一九六一年二月一日。約四三
枚。

第三回 七巻九号(通巻六四号)一九六一年二月一日。約四〇
枚。

第四回 八巻三号(通巻六七号)一九六二年四月一日。約三六枚。

再連載時は合計約一五九枚書かれている。初出の合計枚数は約一
二二枚だったので、新たに書き進められた部分もあるが、再び未完
のまま終わってしまう。

以下、初出との異同を含め、「風雲カピラ城」のあらすじをま
とめる。その際、初出の見出しや数字は〈 〉でくくり、再連載のそ
れは「」でくくり、再連載のそ

再連載第一回は、初出第一回にあつた〈はじまる前に〉の部分
を全面削除し、〈第一章 魔法を破れ!〉〈一、アシユラが村から追
い出される〉とされていた章題、節題を「第一部 アシユラの章」
「アシユラが村を追い出される」と変更し、初出の〈1〉から〈8〉
のうち、〈4〉と〈8〉の部分を除き、場面の区切りも内容もほぼ
そのまま「1」から「6」として掲載している。

冒頭は、短文を重ね、夜明けとともにあたりの様子が浮かび上
がってくるさまながらに物語も姿を現してくる。色、におい、音
の描写で立ち現れたジャングルに登場するのが第一の中心人物ア
シユラである。アシユラは、カーストの中で最下位のスードラの少
年だ。初出では〈はじまる前に〉で入れていたカーストの説明を物
語中に織り込んでいる。

物語の舞台となる北インド一帯は、激しい日照りで水不足に陥つ
ている。アシユラの村では雨乞いの儀式を行うことになり、しきた

りに従って身を清めた一五歳以下の少年が村の神ナーガの山から白い土を取ってこなくてはならない。スードラの中から一人だけ選ばれたアシユラは、カースト上位のバラモンと、ヴァイシヤの少年たちに蔑まれながら、儀式の道具を調べて帰途についていたのだが、「雨こいすると、ほんとうに雨が降るかなあ」とうっかりつぶやいてしまった。ナーガの神を疑うような言葉をナーガの使いの蛇に聞かれてしまったと青くなった少年たちは、アシユラにやり直しを命じ、アシユラを残して去ってしまう。「1」

一人残ったアシユラはわにや虎から逃げているうちに、「狂った王子がおしこめられている」とうわさの塔に行き当たる。「2」

塔の中には、父であるコーサラ国王プラセナディットに一〇年もの間幽閉されている王子ビルダカがいた。そこへやってきたカーラヤナ（騎馬警察長官）が、父王を倒し王位につくよう説く。ビルダカは「陰謀」への荷担に踏み切れずにいる。「3」

その塔の下に、白い象に乗ったシヤカ族の將軍のむすこシヤマがやってくるが、倒れているアシユラに気づき、「自分の体が汚れたような気が」して、食べかけた飯もそのままに去って行く。

気がついたアシユラはひどく空腹ではあったが、「魔法のかかった食物かもしれない。食べると豚になってしまうかもしれない」と思うと手を付けられず、そうこうするうちに近くで火事が起きる。「4」

火が出ているのは、クリシユナというどろぼうに襲われたアシユラの村だった。「5」

クリシユナが去り、ほっとしたのもつかの間、「お前がナーガを疑うようなことをいったから、ナーガがおこって、村を焼くよう

に、クリシユナをつかわしたのだ」と逆上した村人たちに制裁され殺されそうになる。そこへ、白象のシヤマがやってきて、アシユラを群衆から解き放つが、アシユラと母ナルギスは村から追放される。「6」

第二回は初出連載第二回の〈二 都シユラヴァステイ〉〈1〉から〈3〉と、同第三回の〈4〉から〈6〉がほぼそのまま展開される。見出しも「都、シユラバスツ」とされている。人名、地名の表記の変化はあるが、大筋に変化はない。内容は以下の通りである。

村を追放されたアシユラと母は親戚を頼って都に出てくるが、「ちよつと見には、おじょうさんだが、実はグレン隊」のシユメータに荷物を盗まれる。「1」

都にいる親戚のカルバラの家を尋ねまわる。「2・3」シユメータが何かを尋ね回っているアシユラを気にしていると、「コーサラを救マし人、デーバ」の演説が始まる。「4」

デーバが「国の政治が悪いために、どろぼうがふえたのだ」とい、先王を褒め、今のパセナーデイ王は無能力だと批判する。警官隊が駆けつける。逃げる演説男の正体が気になり追うシユメータ。荷物を取り返そうとシユメータをアシユラが追う。「5」

逃げる演説男と追う警官隊が実は仲間であることがわかる。「6」第三回は初出第四回〈第一章 魔法を破れ！〉〈二、都シユラヴァステイ〉の〈7〉と〈8〉が「第一部 アシユラの章」都シユラバスツの「7」と「8」としてほぼそのまま掲載され、「ハツタカ長者」と見出しが変わり、その「1」と「2」は新たに書き下ろされて

いる。続く「3」は再連載の時省略されていた初出第一回の〈4〉と〈8〉の一部が入れ込まれ、「4」は初出第一回の〈4〉が

生かされている。

内容は以下の通りである。

シユメータとアシユラは、騎馬警官隊の隊長ダンラージと演説男の密会を盗み見る。それがばれてつかまりそうになった時、シユメータの兄アーナンダによって助けられる。「7」

シユメータとアーナンダの家には、チンピラ仲間の少年たちがたむろしていた。アシユラは盗まれた袋を返され、せともの作りのおじカルバラの下へ案内してもらえらることになる。「8」

以下、「ハッタカ長者」の章に入る。

アーナンダの案内で、アシユラと母親ナルギスは、カルバラに会いにハッタカ長者の屋敷にやって来る。大規模な仕事場にアシユラは驚く。「1」

留守のカルバラを待つ間、せともの作りたちからクリシユナの話を書く。「2」

そのころ、カルバラはハッタカ長者に連れられ馬で都から離れていた。途中クリシユナの襲撃に遭うが、警官ダンラージの一隊に助けられる。ただで水を飲もうとするダンラージに代金を要求する長者。白象のシユマがクリシユナを捕らえて現れる。カルバラと長者はクリシユナがにせものだと気づく「3」

長者がカルバラを連れて行ったのは、シヤカ族の大臣マハーナマの灌漑工事現場だった。長者はカルバラに瀬戸物作りを辞めてマハーナマの仕事を手伝い地主にならないかと持ちかける。「4」

連載第四回は、「第一部 アシユラの章」「ハッタカ長者」の「5」から「9」で、新たに書き進められている。

アシユラ親子はカルバラに会えたが、受け入れてはくれなかつ

た。「5」

広場のおかゆの列に並ぶナルギスとシユメータ。一方アシユラはアーナンダの家に連れていかれ、その暮らしを知る。「6」

夜更け、アシユラとアーナンダは警察長官カーラナヤの屋敷をめざす。「7」

二人は屋敷へ忍び込み、警察長官とハッタカ長者が国王追放を企んでいることを知る。「8」

二人はハッタカ長者が帰った後、部屋に忍び込む。アーナンダは、カーラナヤを脅し、仕事を求める。カーラナヤは二人にビルーダカ王子を塔から引つ張り出すことと、クリシユナを探すという仕事を与える。「9」

物語はこれからという所だ。文末に「つづく」とも明記されている。しかし、同誌次の号である八巻四号の編集後記に「古田氏の風雲カピラ城は本号休載です」とあるだけで、立ち消えてしまう。

第三節 書きたかつた物語とは

第一章第一節で書いたように、「風雲カピラ城」の元となるシヤカ族滅亡の物語は、「実感的道徳教育論」の「原型」のパートの中で紹介されている。天皇に代わる原理として平和を選んだものの、その原理と戦争に対する憤怒の感情をどのように体系づければよいのか分からないでいた頃、早大童話会に入りシヤカの伝記に出てくるマハーナマという人物に出会う。古田は「この物語を書きたい」「マハーナマという人間に理想のかたちを托したい」と思う。その物語は次のようなものである。

シヤカ族と縁組みを望んだコーサラ王ハシノクにシヤカ族が差し出したのは大臣マハーナマが奴隷女に生ませた女であった。二人の間には生まれたビルーダカは長じてシヤカ族のカピラ城に留学したとき自分の血筋を知り、辱めを受け、その復讐を誓う。父王を追い王位に就いたビルーダカはカピラ城へ向かう。シヤカ族のシヤマという少年がビルーダカを討とうとするのだが、殺生を禁じるシヤカ族の掟を破ったとして追放される。

ビルーダカはカピラ城を攻め落とし、シヤカ族を殺し始める。彼の祖父に当たるマハーナマは、自分が池に潜っている間、殺害を止めてほしいと願う。ビルーダカは願いを聞き入れるが、いつまでもたつても池から上がってこないで調べさせると、マハーナマは池の中の木の根に髪を結びつけて息絶えていた。

再連載時に削除された「はじまる前に」ではこれから始まる話の中心人物として五人の少年少女を紹介していた。

まずアシユラ。次に落ちぶれたヴァイシヤの子どもアーナダ。クシャトリヤの少年シヤマ。マハーナマの■、ラクシユミ。アーナダの妹シユメータ。

この五人のうち、まだ登場していなかったのはラクシユミだ。実にもどかしいことに、古田が書きたいと思ったマハーナマの何に当たるのか、国会図書館所蔵の『小さい仲間』のデジタルデータでは肝心な一文字が潰れていて判読できない。ただ、シヤマの友だちとあることから、彼女も一三、四歳の設定であっただろう。

第三章「風雲カピラ城」に読む未完の問い

第一節 魔法を破れ

わずか四回の連載で未完のままになってしまった「風雲カピラ城」だが、この序章ともいえる部分に、古田の問題意識はしっかりと現れている。

まず、最初の連載で第一章の章題とされていた「魔法を破れ！」ということばが、古田のモチーフの核心部分だったと考えて良いだろう。物語の冒頭で、主人公アシユラは自分が差別され理不尽な扱いを受けているのに、「それをあたりまえと思っている。／なぜかといえば、アシユラはスードラだからだ」（第一回）。アシユラは、駆けつけた村で、村人に押さえつけられたとき、「お前がナーガを疑うようなことをいったから、ナーガがおこって、村を焼くように、クリシユナをつかわしたのだ」と言われると「あ、そうか」と抵抗を止める（第一回）。魔法のかかった食べ物を食べると豚になってしまうかもしれないと思うし（第一回）、満月の夜の黄昏時、十字路には悪魔が出てくる、悪魔の名を口にすると現れると信じている（第三回）。

そのような言い伝えや教えに縛られているのはアシユラだけではない。父王から塔に幽閉されているビルーダカは「おれは呪われているんだぞ。この塔から一足踏みだすと、大地は、ぱっくり口をひらいて、おれをのみこむんだ」と信じている（第一回）。ハツタカ長者の下で奴隷頭として重用されているカルパラも神の怒りを口に

する。カーストや神の規律になんの疑問も持たず従っている生き方を、たたみかけるように織り込んでいる古田が、そこに、自身が縛られていた天皇の呪縛を重ねていることは明らかだろう。

文献A「愛国心・規律・正義・団結」の中の「同じトートテムとタブーを持ち、生活様式を同じくする未開の小集団のむすびつきが、一方では愛国心となり、一方では、規律、団結となってきました。タブーを破った者に制裁をくわえることが正義の根本であったわけです。」(A p.232L3) という部分は、アシユラが村人に制裁され、村を追放されることそのものである。

古田は「近代の合理精神に反する、原始的な力」が支配する世界を物語の舞台にした。そして、それをあたりまえとしていた人間が、どのように覚醒し、抜け出していくのか、まさに「魔法を破れ」という方向へ物語を進めていくこととしていたのだろう。

初出時と、再連載時では、アシユラの動きと、長者とカルパラの動きを同時進行的に書こうとしていてわかりにくかったのを整え、話を先に進めた他は、表現の推敲レベルであり、それほど手を加えていない。ただ、新しく描写を加えた部分が一カ所だけあった。それは、第一回で、シャマが放置していった食べ物をアシユラが食べる場面だ。先に書いたように、最初は食べるも豚になるかもしれないと我慢する。最終的にアシユラは初出時でも食べているのだが、再連載の時、マンガにかぶりついてから、しまったと思うが、自分の足が豚になっていないのを確かめて、「ようし。だいじょうぶだ」と他も食べてしまうという心の動きが丁寧に描写されているのだ。この加筆も、古田が、魔法から解放される過程を書きたいと考えていたことをはっきり教えてくれる。

古田はアシユラに信じていたことを疑う契機を重ねていく。

長者そっちのけでアシユラを制裁する村人たちに、アシユラは「なぜ、みんなはいつものように長老のいうことをきかないのかな」と思っている。逆上した村人たちに川へ放り込めと運ばれる中、アシユラには「ナーガの神が、ほんとうにクリシユナを使って火をつけさせたのか——」という思いも生まれる(第一回)。

村を追われて都へ出ると、さらにアシユラの信じてきたことは揺さぶられる。演説男が「この世の中でいちばんえらい」王さまのことを「無能力」と言うのを聞いたアシユラはめまいを感じる。アシユラの荷物を奪ったシユメータからは「仏さま、だいきらいさ。ぬすみをしちゃいけないとかさ、ばくちをしちゃいけないとか、いってさ」「君は、王様でも、大臣でも、みんなえらいと思ってるんだらう。そんなんじゃないんだよ」と激しいことばをぶつけられる(第二回)。祇園精舎の鐘の音を聞きながら、「王様もえらくない。仏もえらくない。そうだ。バラモンアシヨカもえらくなかった」とアシユラは思う。アシユラの思考と行動を縛っていた魔法が徐々に破られていく。

第二節 人間の原型

初出の「はじめまる前に」で紹介されていた五人の少年少女のうち、登場している四人はそれぞれに、古田が捉えようとした人間の行動と精神の原型として読みとることができる。中心となるアシユラは前節で述べたとおりである。以下、他の少年少女の人間像を簡単に押さえておく。

「グレン隊」のシヌメータは、貨幣すら知らない田舎者のアシユラのが気になる。演説男のあとを追いかけたのも、その正体が気になるからだ。古田は好奇心から動く子どものひとつの典型をシヌメータに托しているように思う。

シヌメータの兄アーナンダは金持ちになりたいというはつきりした欲を持って行動している。古田は、貧乏を恥じる心は、豊かになりたいという心に通じるもので、それは向上を願う心だと肯定的に捉えていた（B p183）。アーナンダの、長者やカルパラに対する思い、父親に対する軽蔑など、かれの向上心はかなり書き込まれている。

シヤマは仏教の経典に登場する人物である。古田は「実感的道徳教育論」の中で「民族の独立をおびやかす者に対して、彼は剣をとった」とシヤマのことも否定できないと書いている。「風雲カピラ城」の中でシヤマは非常に興味深い。シヤカ族で禁じられている肉を食い「とめられたものを食うと、いつそううまい」（第一回）という人物だ。村人の制裁で殺されかけていたアシユラを助けたのは、「なんでもいい。争い、たたかっていたら、それだけでうれしい」ので「ただ自分の力をためし、はりきった気持ちになりたかった」（第一回）だけだった。古田は「愛国（心）や正義」という行動をおこさせる根本的なもの、人間性をどう養い育てるか（A p35）と書いたが、シヤマはその「人間性」が欠けているように見える。少なくとも、正義という目的意識を伴わず、行動自体が目的化している。いずれシヤカ族の掟を破り、ビルーダカを殺そうとし追放されたシヤマを、古田はどのように描こうとしていたのか。「愛国心」とはほど遠そうなシヤマが、ビルーダカを討とうと

したのはなぜか。どのような道を辿ってシヤマは変化するのだろうか。

初出で中心人物とはされていなかったが、ビルーダカも外せない。「実感的道徳教育論」の中で、非暴力、無抵抗のかたちでこそ平和は現れるとし、マハーナマに「人間の理想の形を托したい」と書きつつ、ビルーダカを「彼の執念はすさまじい。鬼畜米英の指導者が平和の勇士に転化する現在、この執念と憎悪は美德でさえある」と書かれている。「平和と、民族独立の相関関係はほくにはまだつかめない」（p200）と書いていた古田にとって、ビルーダカを追うことも大きな思索だったはずだ。

第三節 国との関わり

国王批判の演説は、いままで自分と政治をつないで考えたことがなかったシヌメータに衝撃を与えた。アシユラも政治が良いというのはどういうことなのか、という問いを刺激された。幽閉されているビルーダカを担ぎ出し、ハシノク王を追いつくとする陰謀が進んでいることは書かれている。また、古田の心をつかんだマハーナマは、神の土地を大規模に掘り、水路の大工事に着手している。

腹一杯食いたい、金持ちになりたい、知りたい、力を振るいたい、復讐したい……。古田に造形された少女がそれぞれ自分の欲から動き考え始めている。一方で、目の前の事にしか興味を示さない母ナルギスの姿も印象深く書かれていた。神罰を口にしながら禁を破る庶民も繰り返し出てくる。これは、少年時代の古田を呆れさせた「修身をがんとして受けつけない不死身の連中」の投影だ

ろう。

人がどのように社会に目をむけ、どのように「国」と結びついていくのか。種が埋め込まれていたことだけは確かである。現代児童文学の柱のひとつ、変革の論理の理解もここから深められそう。

おわりに

紙数が尽きて本論では言及できなかつたが、「風雲カピラ城」に見られる実存主義的な子ども像は、「現代つ子」論と合わせて丁寧な読んでいく必要を感じた。また、今回「実感的道德教育論」に導かれて読んだ評論と創作を通して、『うずしお丸の少年たち』（講談社、一九六二年）を再読することで、古田が捉えようとした人間の原型や行動の原理がより深く理解できるように思う。

今年度、古田足日の蔵書や資料が白梅学園に遺贈され、科学研究費助成事業として認可された課題「古田足日と子どもの文化をめぐる総合的考察―蔵書・資料のデータベース化、調査を基に」の共同研究がスタートした。分担研究者のひとりとして、本稿の内容はさらに深めていかねばならない。古田の付箋や書き込みが残る道德教育関連の蔵書や資料、「風雲カピラ城」のスクラップなどを調査していくことで、古田の思想の核は輪郭を明らかにするだろう。

今回、六〇年前の古田のことを追いながら、二〇二〇年のいまを思わずにはいられなかつた。常に「いま」を厳しく問い直す目となる古田足日の仕事を、今後も追っていきたい。

注

(1) 日本児童文学者協会の中での「新しい戦争児童文学」委員会や、「子どもの本・九条の会」など、中心になって起こした運動も多かった。参考：ありがとう古田足日さんの会『古田足日さんからのバトン』（かもがわ出版、二〇一五年）

(2) 「三井三池三川炭鉱で、死者四百五十八人を出す戦後最大の炭鉱事故が発生。また神奈川県横浜市内で鶴見脱線事故が起き、百六十一人の人が亡くなっています。悲惨な事故が同じ日に起きたので、六年十一月九日は「血の土曜日」と呼ばれ、昭和史に刻まれているのだそうです。」君原健二「この道」⑬『東京新聞』二〇二〇年八月三一日夕刊一面。

(3) 一九六三年の誤り。第三五代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディが暗殺されたのは、一九六三年十一月二日。一九六四年三月号掲載なので、この原稿に着手しているまさにその時に、これらの出来事は起こったと考えられる。

(4) 古田足日・米田佐代子・西山利佳編『わたしたちのアジア太平洋戦争 1 広がる日の丸の下で生きる』童心社、二〇〇四年。

(5) 早大童話会出身の古田足日、鳥越信を中心に作られた同人誌。一九五四（昭和二九）年七月〜一九五八（昭和三三）年。全三三号。

(6) 一九四六年三月に設立した日本児童文学者協会の機関誌。この時期は月刊の発行が不安定になっている。

(7) 古田は最晩年、この作品の完成への意欲を口にし、早大童話会に入つたころ自分が読んだシヤカ伝探しを評論家で児童書専門店店主の奥山恵氏に依頼した。奥山が見当を付けたのは、友松圓諦『仏教聖典』（一九四八年刊）講談社学術文庫、一九八一年）であった。古田の逝去（二〇一四年六月八日）により、この本であつてはいたかどうかは確認せずじまいになってしまったという。

参考文献

- 『戦後道徳教育文献資料集 第Ⅰ期 別冊 解説・解題』監修・貝塚茂樹、日本図書センター、二〇〇三年一〇月二五日
- 『文献資料集成 日本道徳教育論争史 第Ⅲ期 戦後道徳教育の停滞と再生 第11巻「修身科」復活と「国民実践要領」論争』監修・貝塚茂樹、日本図書センター、二〇一五年一月二五日
- 『文献資料集成 日本道徳教育論争史 第Ⅲ期 戦後道徳教育の停滞と再生 第12巻「特設道徳」論争』監修・貝塚茂樹、日本図書センター、二〇一五年一月二五日

追記

本稿執筆にあたり、科学研究費基盤研究(C)(一般)課題番号20K02638の援助を受けました。

**The Introduction to the Theory of FURUTA Taruhi:
with a focus on *The Theory of Moral Education based
on Realistic Comprehension***

NISHIYAMA Rika

The Theory of Moral Education based on Realistic Comprehension, FURUTA Taruhi's criticism, it implies the root of his literature. Before World War II, FURUTA had grown up under education centered on the Emperor. After the war, he chose peace as a principle to replace the emperor system and employed this principle by way of children's literature. FURUTA indicates the existence of a primitive sense at the basis of the Japanese mentality. He analyzes that this primitive sense created a vacant patriotism through magical words, and that this sensibility was involved in politics and hampered the perception that people create their own society. One can see that FURUTA was trying to seek how the connection between humans and society could be formed by breaking away from the primitive sense by incorporating the modern rational spirit, even in *Fuun Kapila jyo* (unfinished).

Keywords: children's literature, FURUTA Taruhi, morality, peace, education
